

研究・調査報告書

報告書番号	担当
195	滋賀医科大学社会医学講座福祉保健医学部門
題名 (原題/訳) Alcohol use in New York after the terrorist attacks: a study of the effects of psychological trauma on drinking behavior. ニューヨークにおけるアルコール使用—9月11日の災害後の検討— 精神学的外傷の飲酒行動に与える影響についての検討	
執筆者 Boscarino JA, Adams RE, Galea S.	
掲載誌 (番号又は発行年月日) Addict Behav. 2006 Apr;31(4):606-21.	
キーワード 公共被害、心的外傷後ストレス障害 (PTSD)、アルコール濫用、精神学的ストレス、調査	
要旨 背景・方法： 精神的外傷は精神依存物質、特にアルコールの濫用の増加と関連していることが知られている。このことを評価するために、9月11日の攻撃後1年及び2年後における1681人の無作為抽出されたNew York市民に対し、飲酒量、多量飲酒、アルコール依存について分析した。 結果： 地理的要因、他のストレス要因、社会経済的要因、そして反社会的行動の既往を調整した重回帰モデルでは、the World Trade Center disaster (WTCDD) (9月11日のテロ被害)への暴露が大きければ大きいほど事件後の飲酒量が大きいたことが明らかとなった。さらWTCDD暴露と多量飲酒の関連が事件後1年後では認められたが、2年後には認められなかったことも明らかとなった。アルコール依存とWTCDD暴露の関連は、事件1年後、2年後ともに認められた。Post traumatic stress disorder (PTSD, 心的外傷後ストレス障害) はWTCDD暴露と他の調整要因を調整すると飲酒とは関連がなかった。 結論： 本研究の結果より、精神的外傷は、事件後長期間経過した後でも問題飲酒行動を増加させる可能性が示唆された。更なる検討が必要である。	